

Title	文学は危機を迎えているか?
Sub Title	Is literature in a crisis?
Author	
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2012
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.102, (2012. 6) ,p.107(200)- 108(199)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2011年度慶應義塾大学藝文学会シンポジウム：文学は危機を迎えているか
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01020001-0108

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

—— 文学は危機を迎えているか? ——

日時 2011年12月9日（金）15:00-18:00

場所 三田キャンパス北館ホール

講師 川村晃生（慶應義塾大学文学部教授）

牛場暁夫（慶應義塾大学文学部教授）

司会 巽 孝之（慶應義塾大学文学部教授）

藝文学会企画委員のひとりとしては、じつは恒例の年末シンポジウムのテーマをひねりだすのに、毎回頭を悩ませています。したがって、今回2011年暮れのように、藝文学会と関わりの深い先生おふたりのご退職の年にあたるとなれば、そのご両人を引っ張り出して最終講義代わりのシンポジウムを行なっていただければいいのですから、こんなに楽なことはありません。先例もあります。もちろん、ふつうはまずテーマを決めてから出演者を決めるのがものの順序ですが、まったくその逆の手順を踏みつつ、いざやってみると案外、最初にテーマありきのように錯覚されるケースも決して少なくないのです。

かくして今回の場合は、ひとまず今年度一杯でご退職になる国文学専攻の川村晃生教授と仏文学専攻の牛場暁夫教授というおふたりが早い段階から出演をご快諾くださったので、わたしはそれだけですっかり安心していました。しかし、よくよく考えれば、『万葉集』から『奥の細道』へ至る詩歌文学のテキストを精読しながら欧米理論の最先端を反映した自然環境批評を展開する川村教授と、プルーストの『失われた時を求めて』を精読しながらフランス文学内部の修辞が織りなす音楽を聴き取り、それによって日本文学の言葉をも見直そうとする牛場教授とは、まったく正反対の学風

の持ち主です。あえて異種格闘技めいたバトルを目論むならいざ知らず、ご兩人自身も出演を快諾したのちによくよく考え直されたのか一定の懸念を表明されたため、シンポジウムの一か月ほど前に打合せの場を設けました。その結果、折しも 2011 年には 3.11 東日本大震災が発生し、いたるところで文学の危機と可能性が再検討されるに至っている現象を叩き台とするについては共通理解が成立しましたので、おふたりには敢えて大きな枠組みのなかで思う存分自説を展開していただきたいと思い、「文学は危機を迎えているか？」というテーマに決定した次第です。

はたしてその結果がどうなったかといえ— いっさいの心配は杞憂に終わった、とここで断言しましょう。まったく異なるアプローチから、最終的にはともに人文学の復権を願う方向性が確認されていく展開は、手に汗握る思いでした。そのうえ、討議をまとめるべき司会者への反則技まで繰り出されたシンポジウムが、本誌読者にとってもスリリングでないはずはありません。(巽孝之)

